
異色の御花

真志木さろえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異色の御花

【Nコード】

N0653W

【作者名】

真志木さろえ

【あらすじ】

本来人が持ちえるはずも無い異質な髪の色と力を持ち、それ故過去に苦い経験を持つ榊原葵。

葵はその過去を払拭すべく力を直隠し、何においても目立たないよう学校生活を送っていた。

そしてある時、葵は自分とよく似た少女『落乃火乃花』と出会う。

彼女に惹かれていく中、妹である董も現れ、葵の生活にも変化が起き始めていく…。

第1話 『夕暮れの邂逅』

空の色がすっかりオレンジ色に染まった頃。

時間で言えば、5時を少し回った辺りだろうか。

体育館裏の倉庫で荷物の出し入れを行っていた俺は、ふと空を見上げながら思った。

きれいな夕暮れだな、と。

特段、夕暮れを見る事が少ないわけではない。

だけど、普段であれば、放課後にはささと帰宅してしまう俺にとって、学校にいながら見る夕暮れというのは、なんだか別のもののように思えた。

それは、見慣れている家から学校までの道を、たまに夜中に歩いたときに、まるで別の世界のように感じてしまう、あの感覚に似ている。

物事を行う時間、場所が違えば、それがいつも当たり前のように行っていることであっても、特別に感じることもある。

つまり、今回の夕暮れもまた、そういうことなのだろう。

生徒達の喧騒にて賑わう放課後。

ホームルームが終了し、各々が鞆を手に教室を出ていく中、それに倣い帰ろうとする俺を引き止めたのは、担任兼体育教師の森井直弥だった。

「おい、榊原」

「えっと……、何ですか？」

放課後に呼び止められるなんて、今まで真面目に学園生活を送っていた俺には経験のないことだ。

思わず、何かやってしまったのではないだろうかと今日一日の事を思い返す。

だが、森井からの要件は自分が心配するようなものではなかった。

「お前、これから何か用事があるか？　なければ手伝いを頼まれてほしいんだが……」

「ああ、はい。今日は特に急ぎの用もありませんし、いいですよ」「すまん。体育館裏の倉庫の整理をしなくてはいけないんだが、あいにく他に暇そうな奴もいないし……。じゃあ、ついてきてくれ。」

森井は辺りを見回しながらそう言い、廊下へと歩き出す。

事実、教室に残って駄弁ろうとしている生徒はおらず、皆が皆、足早に教室を出て行っている。

このクラスの皆はそれぞれに放課後やるべきことがある。確かに、放課後に特に予定がないのは俺だけなのだろう。

本当ならば、さつさと家に帰って自由な時間を満喫したいので、放課後に学校に居残ることなどしたくはないのだけれど、それもこのクラスでは仕方のないことだ。

俺は廊下に出た森井を追い、教室を後にした。

俺が通っているこの『仙華高等学校』は、普通校ながら、全員部活制という制度を取っている。

その内容は、高校入学後の4月末までに、必ずどこかの部活に入部しなければいけないというもの。

そのため、この学校の全校生徒は、原則どこかの部活に所属していなければならない。

しかし、原則という言葉には例外が付き物であり、俺もまた、その例外の内の一人だった。

俺の場合は「一人暮らしのため」という理由で、部活の入部を断

っている。

例外について、特に細かな定めはないようだけど、理由如何により、教師達を納得させることが出来れば、必ずしも制度に従う必要はないのである。

全員部活制が強要されるのはあくまで最初の部結成のときまで、つまり4月までだ。

その為、入った部活を、「性に合わない」などといった理由で退部する生徒は何人もいて、自分のように理由があるわけでもなく、無所属の連中は何人もいる。

おそらく、どのクラスにも数人は居る按配のはずだ。

だけど、残念なことに、自分が所属するクラスの中にはそういった生徒はいない。

森井がそういうことに関して、特別厳しいからだ。

そして、正式な口実あつての部活無所属は、クラスで俺一人だけ。つまり、今回の雑用という名の白羽の矢は、このクラスにおいて、自分にしか立つことはなかったということだ。

「もう5時過ぎか……。粗方整理は終わったし、後は先生がやるから、お前は帰っていいぞ。今日はありがとうな」
「いえいえ。それでは自分はこれで」

夕焼け空を見上げつつ作業をしていると、森井から帰っていいというお達しが出た。

この場はその言葉に甘え、倉庫を後にするでしょう。

整理とはいえ、やった事といえば細々とした荷物を出し入れするだけで、埃こそ多少は被ったものの、そこまでの重労働ではなかった。

手伝いは無償でさせられたとはいえ、そこは少しばかり安堵した

部分だ。

「案外早く終わったな。帰ったら何しよう……その前に買い物か」

帰宅後の事に思いを巡らせながら、校舎へと続く外廊下を歩く。

廊下にもやはり夕陽は差し込んでいて、部活動中なのだろう、生徒達の声が木霊してくる。

放課後であれば当たり前なのだろうその光景に、何故か気分が高揚していくのを感じる。

俺は、祭りを外から眺めるのが好きだ。

祭りの中心に行つて盛り上げようとするでもなく、盛り上がりにまぎらうとするでもなく、ただ外から眺めて満足するだけ。

昔から目立つのを避けて生きてきた為に身に付いてしまった、習性とも言えるような楽しみ方だった。

おそらく、既に自分の中に根付いてしまっているものだと思う。

この場においては、放課後に部活動に励む生徒達を遠くから眺めるという自分の行動に、多少酔ってしまった部分があるのかもしれないかった。

そして、そんな事を考えながら歩いていた時だ。

彼女を初めて目にしたのは。

角を曲がったところで、俺は外廊下の途中に三人の男女がいるのを見た。

内二人は男子で、ブレザーのネクタイの色から同学年である事が分かる。

知った顔ではないので、多分別のクラスの生徒だ。

そして、残りの一人が女子で、リボンの色からやはり同学年である事が分かる。

しかし……。

俺の目はそんなものよりも、その子の持つ髪に釘付けになっていた。

腰まで届くほどの長さを誇るその髪は、遠目から見ても非常に艶やかであることが窺がえ、そしてその色は、赤みがあった黒色をしている。

それを見て俺は、何の根拠も理屈もなく、何故か思ってしまった。すごく、綺麗だと。

一見すれば、濁った赤色にも見えてしまうその髪の色を、純粹にそう思ってしまった。

自分でも理由は分からない。そして、それは髪に限ったことではなかった。

彼女自身に関しても、何故だか非常に親近感を抱いた。彼女の何を知る訳でもないのに、酷く他人のような気がしない。

あの子の髪の色、おそらく染めたのではないと思う。この学校は校則がそれなりに厳しい。

たまに検査などもある為、髪を染めるなどすれば直ぐにばれてしまう。

茶髪などに比べれば、あの色は相当目立つ。

それでも彼女がああ髪色を保持しているということは、つまりはあれが彼女の地毛だからなのだと言える。

ともすれば、何らおかしいことはない。

でも、日本人であの髪の色を持って生まれてくることは、まずありえない。

それなのに、俺はそれを純粹に綺麗だと思い、何もおかしいことだとは思えなかった。

その考え自体、おかしいというのに。

歩きながら、改めて三人の状況を確認する。男子生徒二人は、女の子を囲んで口々に話しかけている。

ただ、女の子の方は俯いていて、二人の話に反応している様子は

ない。

そんな彼女の反応に対して、男子生徒二人は顔を曇らせている。どうやら、楽しくお喋りをしているというわけではないようだけど、かと言っていじめがなされているような陰呑な雰囲気でもない。とはいえ、彼らを取り巻く空気が良いものであるとも思えなかった。

……………。

別に、だからというわけではないのだが、気付けば俺の足は彼女らの方を目指して進んでいた。

こういうのはあまり柄ではないけど、仕方ない。

本来、俺はこんな他人の間へ割って入る事などしない。

極力自分が目立つような行いは、避けるようにしているからだ。でも、その事を割り切って余りあるぐらいに、何故か彼女の存在を、俺は酷く放っておけなかった。

何にせよ、事は穏便に済ませないと。そう心に留め、俺は男子生徒二人に声をかけた。

「あの、ちょっといいかな」

「ん？」

俺の声を受けて、男子生徒二人はこちらを振り向く。

自分に近い場所にいる男子は、こちらの姿を一瞥すると、怪訝な表情を浮かべながらもう一人に小声で話しかけた。

「お前の知ってる奴か？」

「いや、僕も知らない」

そう返事を受けると、改めてこちらを見遣り、話しかけてくる。その表情は、あまりこちらを歓迎している風ではない。

「なんだよ。こっちはあまり暇じゃないんだけど」

「えっと、特にそちらのやり取りに口を挟むつもりはないんだけど……」

そう前置きをし、話を続ける。

「俺、さっきまで森井先生を手伝って、体育倉庫の整理をやってたんだ。もう後は片づけと戸締りだけだったし、そろそろこっちに来るんじゃないかな」

「まじかよ」

俺の言葉を聞いた途端、二人は顔を青くする。それもそうだろう。森井は絵に描いたような熱血教師で、規則にも厳しく、多くの生徒から恐れられている。

今の彼らの状況は、周りから見ているとあまり良い気のしないものだし、何せ放課後になってそれなりに時間が過ぎていく。

部活もやらず、こんなところで何をしているのかと、声をかけられるのは確実だろう。

例えやっていることが悪い事でなくても、森井に見つかって下手な因縁を付けられるような事態には、陥らないに越したことはない。

「仕方ねえ、今日はもう帰るぞ」

「う、うん」

「じゃあな、落乃」

少し慌てながらも彼女に一声かけると、二人は手早く帰って行った。

「……………」

俺と『落乃』と呼ばれた彼女だけが残り、その場を沈黙だけが支配する。

落乃は顔を上げてこちらを見ていて、今はその全体像を確認する事ができた。

先程は俯いていて見えなかった顔は、その小柄な体に似合う童顔で、可愛らしいものだった。

肌は白雪を思わせるほどに白い。

それでいて、服の上から見ても分かるぐらいにスタイルは良く、おそらく誰も見紛うことも無いだろうという程に、可憐な少女であつた。

そんな彼女は、先程からずっとこちらを見詰めている。

その表情は憂い顔で、どうにも儚さを感じさせる風貌だった。

……いつまでもこうして見てるわけにはいかないな。

そう思い直し、落乃に声をかけようとした。でも、

「えっと……」

続く言葉が出てこない。

こんな時にどう言葉を掛けてよいか分からないうえ、そもそも自分は女子と話す事さえそう多くない。

どうしようという焦りが頭の中をぐるぐると回り、余計に何も浮かんでこなくなる。

そもそも、何でこんならしくないことをしようとしたんだ、などと、本末転倒な事さえ頭に浮かび始めた、そんな折。

先に言葉を発したのは落乃の方だった。

「助けてくれたことに関してはお礼を言います。ありがとうございました」

落乃は礼儀正しくこちらに頭を下げる。

落乃の発する声は、見た目とは裏腹に幾分か落ち着いた低いものであり、妙な冷たさを孕んでいた。

そして、その言葉には続きがあった。

「でも……私に、私なんかには、あまり関わらないで下さい」

言葉ほどには尖っていない、弱々しい口調でそう言うと、落乃は踵を返して校舎へと去って行った。

落乃の最後の言葉、そこから俺に伝わったことは二つ。

一つは、その言葉が、俺を拒絶するものであったということ。

そして、もう一つは疑問。

見てしまったのだ。

振り返り際の、彼女の悲しそうな表情を。

それは、拒絶という行為が、彼女にとって意に反したものだっただけなのではないだろうか。

それとも、別に何か理由があるのか。

今の時点では、分かりようも無いことだった。

2月18日 木曜日

翌日の昼休みのこと。

昼食のパンを購買で買い終えた俺は、教室への帰り道、昨日の男子生徒二人と廊下で出くわした。

「お前は昨日の……」

「や、やあ」

相手の言葉に対し、ぎこちない返事を返す。まさか、昨日の今日で出くわすものとは思ってもいなかった。

さて、何を話したものでろうか。それとも、さっさと立ち去った方が良いのか。

そんな事を思案しているうちに、あちらの方から先に口を開いた。

「……お前って、落乃と付き合ってたのか？」

「え？」

予想外の問いに、気の抜けた返事を返してしまう。

「それとも、友達か何かか？ 中学が一緒だったとか」

何故、そんな事を聞かれるのだろうか。昨日、仲裁みたいなことをやったから？

だとしても、付き合ってたのかなんて、安直な考えだとは思っけど。

現に俺は、彼女とは昨日が初対面だ。

「いや、そんな事はないし、彼女と会うのは昨日が初めてだけど」

「まあそうだな。あいつに彼氏なんているわけないか。そもそも、友達すらいないだろうしな」

「確かに」

俺に話しかけてきた気の強そうな方は、詰まらなそうな顔でもう一人の線の細い方に話しかける。

『友達すらいないだろうしな』という言葉に、わずかな引つかかりを覚える。

昨日の事に、何か関係していたりするのだろうか。

本来ならば、関係のない俺が立ち入っていい事ではないのかもし

れない。

でも、彼女のあんな表情を見たら――

――立ち入らずには、いられなかった。

「あの、差支えなければ、昨日何の話をしていたか教えてもらってもいいかな？」

俺の言葉を聞いて、二人は顔を見合わせる。

「他のクラスの奴には関係のないことだけど、まあ隠しておく事でもないか」

「そうだね。うちのクラスの皆は知ってることだし、後々の事を考えたら、別に言っておいても悪い事ではないと思うよ」

話すことに特に問題はなかったのか、二人は数歩歩いて廊下の窓側に移動した。

俺もそれに倣って、彼らの近くに移る。そして、気の強そうな方の生徒が口を開き、話は始まった。

「あいつ、名前は『ふきのほのか落乃火乃花』って言うんだけど、入学当初から今まで、クラスの奴らと関わりうとしたことが全くないんだよ。大概どのクラスにもいつも一人でいる奴つていると思うんだが、落乃と比べたら全然ました。」

今までの事を思い出しているのか、一拍おいてから話を続ける。

「授業では自分から発表することなんかしないし、同じくクラスの話し合いとかで進んで意見する事もない。クラス委員と係りも、最後まで余ったどうでもいいような奴をやってる。それぐらいならい

いんだよ、俺もそんなもんだし。だけどあいつは……」

「ほら、クラスの皆で頑張らなきゃいけない行事とかあるでしょ。文化祭のクラスでの催し物とかさ。落乃さんってそういうの全然やってくれようとしなんだ。僕ってクラス委員長やってるんだけど、そういうことがあるたびに落乃さんに言い聞かせなくちゃいけない」

苦笑しながら、線の細い方が言う。昨日の様子から見ても、その結果は芳しくなかったのだろう。

「一人でやる仕事は真面目にやるんだけどな、皆でやる事になるとすぐ逃げ出すんだよ。昨日はいい加減その態度を改めてほしくて放課後呼び出したんだ」

「2年への進級、まあつまりクラス替えを再来月に控えた今になって言うのもどうかと思ったんだけど、今後の事を考えれば、むしろ今の方が彼女の為でしょ」

「なるほど……」

話は納得できた。

でも、となると昨日の自分の行動は、彼らにとって邪魔なものだったのではないだろうか。

「じゃあ、昨日は俺邪魔な事を……」

「いや、別にいいんだよ。そこまで期待してたわけじゃないし、実際あの結果だしね」

「ああ。それに森井に目を付けられても厄介だしな」

「それならよかった」

二人の返事にほっとしつつ、今の話から落乃火乃花について考える。

落乃と俺は、似た者同士なのかもしれない。

自分も、クラスでは割りと一人である事が多い。

彼女は人との接触を極端に拒むことによって、他人との関わりを持たないようにしているようだ。

自分の場合は、目立つ行動をせず、話しかけられる機会を極力減らす事で、他人を拒むでもなく、それでいて、些かの興味も持たれないようにしている。

どちらも、人との関わり合いを避けようとしている点では一緒だ。とはいえ、俺は落乃ほど徹底してはいないけれど。

クラスで積極的な行動こそしないけど、行事等では、目立たないながらも皆で取り組むべき事柄にはちゃんと従事している。

それに、少ないながらもクラスメイトとは話もする。

唯一人ではあるが、親友と呼べる者も存在するのだ。

落乃と俺の、根底にあるものは一緒なのだろう。

始めから全てを拒絶している落乃と、ある程度は受け入れ、そこに余地を求めている俺。

あくまで、程度の差、程のものでしかないのかもしれない。

でも、そこから生まれてくる差が、こうも如実に現状に現れていることを考えれば、彼女をそこに追いやっているものが何なのか、やはり気にならずにはいられない。

その理由とは、一体……。

「なあ、それよりもよ」

「うん？」

声を掛けられたことで、いつの間にか考えに没頭していたことに気付かされた。

気の強そうな方が、俺の頭を指さしている。

「昨日初めて見たときから気になってたんだが、それって……」

落乃の話の最中から、二人の視線は時折俺の頭の方へ向いていた。恐らく、尋ねたくてたまらなかったのだろう。

「ああ、これは――」

俺は何の事もなく、いつものようにその問いに答えた。

2月19日 金曜日

昼休みの来訪を告げるチャイムが鳴り響いてから、既に5分ほどが経過した。

教室の中では既に大半の生徒が弁当を広げ、昼食を取っている。

俺はというと、昼食をどうするかという問題で、一人思案していた。

昨日と違い、弁当はある。冷凍食品ばかりを詰め込んだ、非常に温かみのない弁当ではあるが。

問題は、一緒に昼食をとる相手がいないことだ。

小学校来からの友人であり、いつも食事を共にしている『小笠原^{おがさわら}博人^{ひろと}』は、今は教室に居ない。

博人は部活動無所属の俺と違い、弓道部に所属している。

今日は部のミーティングがあるので、昼食と一緒にとれないとの事だった。

こういった事は今回が初めてではなく、今まではその度に一人教室で食事をとっていた。

でも、今回は場が悪かった。

教室の隅の方に席があれば問題はなかったのだけど、2月の頭に行われた席替えで、俺は見事に教室のど真ん中の席を獲得してしまったのだ。

これでは、周りがうるさいうえに、非常に肩身の狭い思いをしながら食事をしなければいけない。

かと言って、博人の他に気軽に食事を共に出来る相手は居ない。どうしたものだろうか……。と、思案の末、一つのアイデアが思い浮かうんだ。

俺は弁当の入った鞆を担ぐと、そのまま教室を後にする。
目指すのは、校舎裏だ。

俺が通うこの学校の校舎は、H字型に建っており、一方はグラウンドを挟んで校門と面していて、もう一方はちょっとした林と面している。

林と面している方は、そこからは外との通り抜けが出来ないので、もっぱらそこが校舎裏と呼ばれていた。

外で昼食をとる時に使われる場所は、大体が校舎と校舎に挟まれた中庭だ。

校舎裏にも一応食事スペースはあるのだが、そこはほとんど使われていない。

林に面したその場所は、中庭ほど広くなく、更には木々や植物が多いせいか、年中じめつとしている。

その陰気な雰囲気が、多くの生徒には受けていないらしい。

そのため、昼休みを除いても、校舎裏には人が居ないのが常だった。

とはいえ、冬真っ盛りの今の季節では、中庭ですらそう人は居ない。

そして、校舎裏ならば輪をかけて誰も居ない筈だ。

この寒さの中外に出るのは多少辛い部分もあるが、以前から校舎裏のような静かで緑に囲まれた場所で、一人で食事をとるといったをやってみたいと思っていた。

あまりこういう機会はないだろうし、今やっておいて損はない筈

だ。

一階の廊下を進み、外廊下へつながる扉を開く。

「……寒い」

外から冷え切った空気が入ってくる。

おもわず外へ出るのを躊躇ってしまうが、流石にここまで来ておいて引き返すわけにもいかない。

幸いにも今日は風が吹いていないので、幾分寒くはないだろう。歩みを再開し、外廊下を進む。

ここを数メートル進めば、そこはもう校舎裏で、すぐそばにベンチが一つある筈だ。

今日はそこで昼食としよう。そう考えながら、校舎裏へと辿り着いたとき、

「あつ……」

そこに、思わぬ先客を見つけた。

彼女はベンチの真ん中に腰を下ろし、膝の上に弁当を広げ昼食を取っていた。

寒さ対策なのか白いコートを着ていて、その白さ故、腰まで伸びる赤みがかかった黒髪が綺麗に映えている。

それはまるで、雪上に落ちた赤い椿の花のようだった。

そう、落乃火乃花が居たのだ。

「あなたは……」

落乃も俺に気付き、箸を止める。そして、一昨日に続き、またも沈黙が流れた。

非常に気まずい。これは、戻った方がいいのだろうか。

しかし、ここに来て今更教室に戻るといふのは非常に気が引ける。そう思った俺は、思い切って落乃にある提案を出してみることにした。

「あの、良かったら弁当一緒に食べてもいいかな？」

「えっ……」

肩身の狭い思いをしながら教室で弁当を食べるより、まだここで彼女と二人で食べた方がましだ。

そう思った俺は、精一杯の笑顔で申し出た。

「……………」

恐らく、落乃の目にはぎこちない笑みを浮かべる俺の顔が映っていることだろう。

そんな俺を見る落乃の表情は、驚きに満ちていた。それもそうだが、大して知りもしないような男に、いきなりこんな事を言われたのだから。

だが、しばらく考えている様子を見せた落乃は「隣で良ければ」と言い、ベンチの端の方へと体をずらした。

「あ、ありがとう」

こちらも、ベンチの端へ腰を下ろす。

自分で言うておきながら、まさか許可が得られるとは思わなかった。

俺が弁当を鞆から取り出し、食事を始めるのを見届けた落乃は、ようやく食事を再開した。

寒さの所為だけじゃない、緊張の所為も相まって、箸の動きがぎこちない。

何故、落乃は俺の申し出を断らなかつたんだろう。

ちまちまと箸を動かす落乃の姿を横目で眺めながら、俺はそんな事を考えていた。

校舎裏なんて所で落乃に出会った事ですっかり頭の中から飛んでいたが、一昨日俺は落乃に『関わらないで』と言われていたのだ。

昨日聞いた話からしても、ここは俺の申し出を断るのが本来の彼女の反応ではないだろうか。

気まぐれ？

……ではないか。

入学してからずっと人を遠ざけていたんだろうし。じゃあ一体――

「あの、何か？」

「えっ？」

まずい、ちらちら横目で窺っていた筈が、考え事をしていた所為で、凝視してしまっていたみたいだ。

落乃は怪訝そうな顔でこちらを見ている。俺は取り繕うように、頭に浮かんだ事をそのまま言った。

「いや、その髪、すごく綺麗だなあと思ってさ」

嘘は言っていない。

実際、一昨日はその髪に惹かれ、そしてその髪を持つ彼女に惹かれたのだから。

落乃はまたも驚いた顔を見ると、すぐに俯き、こう言った。

「おかしい事を言いますね、この髪が綺麗だなんて」

「そうかな？　今まで言われたことなかったの？」

「ありますよ。でも、大体の人が、私と最初に会った時に珍しがっ

て言うだけで、あくまでその程度のものでしかないんです」

「そんな言い方をするって事は、やっぱりその髪、地毛なの？」

「はい」

「俺はいい色だと思うけど」

「それを言うなら貴方だって」

落乃は俺の髪を見ながら言う。

「紺色の髪の人間なんて、普通は居ませんよ」

「……まあ、そうだよな」

視界にちらりと映るその前髪を右手で摘まむ。

そう、俺の髪も落乃と同じで、日本人どころか人としてまずありえない色をしていた。

その色は、紺。

「これも君と同じで、地毛なんだ」

「そうでしょうね。でなければ、真っ先に先生に注意されて元に戻されるでしょうから」

そう言うのと、落乃はまた俯き、黙り込んだ。

『この髪が綺麗だなんて』

その言葉から読み取れるのは、おそらく彼女にとって自身の髪は好ましいものではないということ。

外を歩いていて人からじろじろと頭を見られたり、ひそひそと何かを言われたり、初めて対面した人に驚かれたりっていうのは、もう流石に慣れたことではあるけれど、俺だってこの髪を好きであるというわけではない。

だが、なんとなくではあるのだが、彼女にはその髪を嫌いになつてほしくはなかった。

だって、本当に綺麗なのだから。

「でも、やっぱり俺は、その髪は綺麗だと思うよ」

落乃は、またか、とも言いたげな顔でこちらを見る。

「ほら、今白いコート着てるし、雪の上に落ちた椿の花を連想させられるというか」

「椿の花の色はもつと濃い赤ですよ。私の髪の赤色は鈍い」

「た、確かにそうかもしれないけど、完全に赤じゃない分、黒髪の艶？　みたいなものもあってやっぱり綺麗だと……」

まるで言い訳でもしているかのように、どんどん口からあふれ出てくる自分の言葉に、俺は自分自身のことながら呆れてしまった。

彼女の髪が綺麗だと思うのは本心であり、俺は彼女に自身の髪のことを嫌いになってほしくない。

でも、どうにもそれを口で伝えることが、俺は壊滅的に下手なようだった。

落乃の表情は先程から露ほども変わっていない。

その彼女の反応から見ても、落乃に俺の本心が伝わっているとは到底思えなかった。

そもそも、大して面識のない俺からこんなことを言われても、困惑してしまうだけだろう。

「……なんて、たいして君を知らない俺がこんなこと言っても困るだけだよ。ごめん、今のは――」

「はあ」

俺の言葉を、落乃の溜息が塞いだ。

馬鹿な事を言う俺に、呆れてしまったのだろうか。

しかし、次に落乃の口から出た言葉は、俺の想像していたものは違っていた。

「落乃」

「……え？」

「落乃火乃花です、私の名前。貴方の名前は？」

俺の目を見つめながら、落乃は言う。

「お、俺の名前は、葵。さかきばらあおい 榊原葵」

「では、榊原君と呼ばせていただきます」

落乃はそう言うのと、残っていた弁当の中身に手を付け始めた。もう話すことは何もないらしい。

俺はというと、そんな彼女の予想外な言葉に驚きを隠せなかった。数秒ほど固まってしまっていたかもしれない。

でも、ようやく頭が回り始めて、浮かんできた感情は、驚きだけではなかった。

それは勿論、喜び。

俺は落乃の名は知っていたけれど、落乃はその事を知らない。その落乃の方から、ちゃんと名乗ってきてくれたのだ。

結局、その後は特に会話もなく、昼食と昼休みは終わった。しかし、何かしらの進展はあった筈だ。

教室へ戻る前に交わした会話を思い返す。

『あのさ、また今度ここに弁当食べにきてもいいかな？』

『……どうぞご自由に。ここは私の指定席ではないですから』

落乃はそんな事を、そつぽを向きながら言っていた。そんな落乃のつんけんとした行動に、むしろ俺は心が安堵した。

そのときの落乃には、一昨日俺を拒絶したときのような冷たさは感じなかったのだ。

結局、落乃が何故あのとき俺を拒絶したかは分からなかったけど、おそらく彼女なりに俺を受け入れてくれたのだと思う。

そう思うと、妙な嬉しさがこみ上げてきた。

まあ、あくまで、俺の主観で感じたことではないんだけど。

今の時刻は、19時を少し回ったところ。買い物などで町を回っていると、すぐにこんな時間帯になってしまった。

空は既に暗く、星も瞬き始めている。

家であるアパートまでの帰途に着く中、俺は改めて今日落乃に言った事を思い返していた。

らしくもないような事をあれだけ喋ってしまったのは、ひとえに、落乃に自身の髪の毛の事を嫌ってほしくなかったからだ。

では、逆に俺自身はこの紺髪を好きになれるのか。

答えは『否』だ。

落乃にあれだけのことを言っておきながら、俺自身には決定的にこの髪を好きになれない理由がある。

俺は、辺りに誰も居ない事を確認し、右手に持っていた鞆と買い物袋を左手に持ち替え、空いた右手の手の平を見つめた。

すると、淡く、蒼白い光が、手の上で僅かに走った。

その発光はほんの2、3秒続いて消え去り、その後の手の平には、先程まではそこになかった筈の氷の塊が鎮座していた。

手の平で覆える程の大きさであるその氷を、俺はしばらく見つめ続けたあと、道の脇に放った。

俺が自身の髪の色を好きになれない理由。それは、先程のような人間として出来る筈のないことが出来るから。

髪の色が原因なのか、あるいは力の副作用なのかは定かではない。でも、どちらにしてもこういうことが言えるのではないだろうか。

「……異質な力の、象徴」

だから、好きになんて、なれる筈がなかった。

第2話 『予兆の誓』

俺のこの力は、生まれつき持っていたものなのだと思う。

生まれたときから使っていたわけではないが、その時には既に髪は紺色だったと聞いているので、恐らくそうなのだろう。

とにかく、俺は小学校に入学する頃には、力を使えるという自覚があった。

その当時の俺が、どういった経緯でそれを認識できるようになったかは覚えていない。

誰に教えてもらうでもなく、本能的に理解する、という感覚の話だったのかもしれない。

そこが謎ではあるのだが、別にそれは瑣末なことにすぎない。

問題なのは、俺はこの力の所為で“ある出来事”を境に、周りから気味悪がられる存在になってしまったという事だ。

幸いにも、いじめのような大きな問題に発展する事はなかったけれど、それも当然の話だった。

決して関わってはいけないという暗黙の了解でも築かれていたのか、皆一切俺には近づこうとせず、不可抗力で話をせざるを得ない状況になったらなっただ、まるで腫れ物に触るように接してくるのである。

こんな事態になってしまえば、いくらその時の自分が幼かったとはいえ、流石に認めるしかなかった。

何の謂れもなく、俺は畏怖されているわけでは無い。

そこには、皆が気味悪がる奇怪な力を自分が使えるという事実が、確かに存在しているのだと。

だから自然に、俺もクラスメイトらを避けるようになった。

そして、それ以降、人前で力を使うなんて馬鹿な真似もしなかった。

事態に気付いた親から言いくるめられたから、という理由もあった。

たが、なによりも、それがやってはいけないことだったということ
を、これもまた、幼いながらに俺は理解した……というよりは、理
解せざるを得なかったからだ。

そんな俺の物分かりのよさと、それに付随した行動が功を奏した
のか、“ある出来事”というのは小学校低学年の頃に起きたことな
のだが、あれだけ避けられていたのが嘘のように、学年が上がるに
つれて、俺を気味悪がる者はどんどん少なくなっていくた。

人の噂も七五日ということわざがある。

事件やスキャンダルが世間を騒がせ、新聞や雑誌、テレビのニユ
ースを連日埋め尽くす、なんてことは、一年という短い期間の間で
さえ何回も目にする光景だ。

しかしながら、その一つ一つを拾い上げて見てみれば、それらが
マスメディアを独占している期間なんて、高が知れている。

何と言ったって、世界は彼らが退屈する暇なんて与えないほどに、
新しい事件という名の餌をばら撒いていくのだ。

情報媒体が今ほど発達していなかった昔でさえ、伝聞でその時々
の世間話というものは、どんどん上書きされていった。

小学生という多感な時期であれば尚更、興味の対象というものは
移り変わってゆく筈である。

俺が何も行動を起こさないのを見て、皆奇怪な力の事など忘れて
しまつか、そんな変な力なんてものは存在しないしありえないと、
あの出来事をなかったことのように切り捨てて行ったのかもしれない。
い。

中学に入る頃には、俺を避ける連中なんて、同じ学年に数人程度
だった。

しかし、何の拍子でその事が露呈するか分からない。

だから、俺は極端に人を避けるのは止めて、とにかく目立たない
ように生活を送ることにした。

その結果が、今の自分に繋がっていると云っていい。

そして、高校受験を控える中学三年の夏休み、俺は全てを吹っ切

る為に、隣県の高校に進みたいという旨を、両親に告げた。

両親とも、最初は反対していた。

力の事を心配して、というのもあるし、なにより俺はそれまで家の手伝いを全くやってこなかった為、家事全般がからつきし駄目だったからという理由もある。

両親だけじゃない、妹も隣県の高校への進学に反対していた。何故か両親よりも、その反対ぶりは強かった。

だが、何とか両親の反対を押し切り、俺はこの高校を受験し、見事合格する事が出来た。

そして、嫌な思い出ばかりの地元から抜け出すことに成功したのだ。

おそらく、俺の短い人生の中でも、大きな分水嶺となる出来事だったのだと思う。

まあ、一つ不可解だったのは、両親でさえ最後には折れてくれたというのに、何故か妹だけが最後まで反対し続けたことだ。

小さい頃から世話焼きで、妹ながらに面倒を見てくれたから、余計に俺の事が心配だったのかもしれないが、何もあそこまで憤慨しなくても、というぐらいに、普段の温厚な性格からは考えられないくらいの断固とした反対っぷりだった。

あの時のことを思い出すと、今でも胃が重くなってくる。

昔の事を思い返しながら歩いていると、気がつけばそこは自宅であるアパートのすぐ近くだった。

時間が時間なので周りは暗いものの、既に視認できる位置にそれはある。

アパートは2階建てで、自分が住んでいるのは2階の一番奥の部屋だ。

帰ったらまずは飯にしよう。そんな事を考えながら、視線をアパートの自室の方へと向ける。

そこで、俺は自分の目を疑った。

——部屋の電気が……付いてる？

思わず立ち止まって、今の状況について考える。

電気の消し忘れ？ いや、今日の朝は電気なんてそもそも付けてなかったし、それはない。

とすると……。

必然的に頭の中に残った一つの可能性、それは……

「空き巣！」

最近、空き巣がこの付近に出没したなんて話は聞いていない。

まさか、自分の家が被害者第一号になったということなのだろうか……。

「と、とりあえず警察に電話を……」

所詮一人暮らしの学生の部屋だ。

盗まれてかなりの損害が出るような代物はないが、盗まれる物はないに越したことはない。

携帯電話を取り出し、110番へつなげるべくボタンに指をかける。

でも、もしここで警察に電話したら、その後はどうなるんだ？

そんな自分の思考が、作業を途中で止めてしまう。

警察が駆けつけて犯人を逮捕するか、もしくは間に合わずに逃げられてしまうか。

つまりは被害が出るか出ないかだが、今はその事は置いておく。

この二つの可能性の場合、どの道“空き巣に入られた”という事実だけは残ってしまう。

そうなれば、たとえ犯人を逮捕できたとしても、警察は地域住民への注意の呼びかけを行うだろう。

もちろん、学校へ連絡も行くはずだ。

学校側がこの事を知れば、俺が一人暮らしだという事を考慮して、わざわざ家へ連絡を入れてしまうかもしれない。

そして、その連絡を聞いた両親は、きっと露骨に心配するに違いない。

一人暮らしを始めてもう一年は経とうとしているのに、未だに心配の電話を頻繁にかけてくるような親なのだ。

妹にいたっては、これを機に家に帰って来いと言いかねない。

『聞きましたよ、兄さん。空き巣に入られたって話。

一人暮らしなんだから、防犯には余計に気を使ってくださいって何回も言ってたじゃないですか！

やっぱり兄さんに一人暮らしなんて無理です！ 今すぐ戻ってきてください、さあ今すぐに！』

絶対に、こうなってしまうと思う……。

自分呼び戻そうとする妹の姿が容易に想像できる。

やっぱり警察は駄目だ。今の平穏な生活を奪われるわけにはいかない。

深く深呼吸をして、心を無理にでも落ち着かせる。覚悟を決めなければ……。

ここは、自分で何とかするしかない。

なるべく音を立てないよう、静かに階段を上がった俺は、次に腰を低くしてそのまま自分の部屋の前まで移動した。

玄関に耳を当てて、中の様子を窺う。わずかにだが、物音のようなものが聞こえてきた。

やはり、誰かしら人がいるのは間違いないようだ。そのままドアノブに手を掛け、回す。

鍵は……開いている。俺は改めて、静かに深呼吸を繰り返した。何とか気持ちを鎮めようとするものの、既に心臓の鼓動は早鐘を打っており、手の平や首筋にはじっとりと汗が浮かんでいた。

自分がどれだけ緊張というものに弱いのか、嫌でも理解できてしまっ

俺が今からやる事は、空き巣犯に気付かれずに近づき、不意打ちで撃退すること……。

当然ながら、それがどれだけ無茶な行いなのかは分かっている。

自分は運動はそれなりに出来る方だが、喧嘩は全くやったことはないし、武術の類も習った事はない。

若さだけが取り柄の全くの素人が、誰ともしれない相手に対して挑もうというのだ。

無茶以外の何物でもない。

ましてや、相手が包丁などの凶器の類を持っていれば、今度は自分の命に関わる問題にもなってくる。

さすがに……丸腰は怖いな。

何か棒状のもの……ほうきでもいいから、そこらに何かないだろうか？

周りを見渡しても、2階の廊下はきれいに整理されていて、もの一つ転がっていない。

……仕方ない。

辺りに誰も人が居ない事を確認し、能力を発動する。右手の手の平の上で蒼白い光が瞬き、数秒を持って氷の棒が生成された。

長さは警棒程度。

室内で使う事を考慮して長過ぎないように作ったが、それがどれ程のプラスになるのかは、正直持って怪しいところだ。

最後に俺はもう一回深呼吸をして、氷の棒を強く握りしめた。行こう。

音を立てないよう、慎重に玄関を開け、半分ほど開けたそこから入り込む。

玄関は完全には閉めず、僅かに隙間が開く程度にした。

何か考えがあつての事ではない。単純に、音が出てしまう事が怖かったからだ。

玄関から見えるのは、居間の半分ほど。幸いなことに、そこに空き巣の姿はない。

そうなると怪しいのは、自室、今は使用していないもう一つの部屋、ここからでは死角になって見えないキッチン、風呂・トイレ、という事になる。

流石に風呂やトイレに居る事はないと思う。となると、空き巣がいるのはおそらく二つの部屋のどちらか。

目星は付けた。だが、キッチンに居る可能性もまだ捨てきれない。まずはそこから確認していく必要があるだろう。

息を殺しながら、慎重にキッチンの近くまで進む。わずか数歩のことながら、いやに長い時間に感じられた。

角を隔てれば、キッチンはすぐそこ。既に覗きこめる場所に、そこはある。

だが、もしそうして目でもあつた時には、正直俺は次の行動へ移れる自身がなかった。

ここに来て、俺の緊張もピークに達していたのだ。

手にはかなりの汗が浮かんでいて、何の拍子で氷の棒を落としてしまつか分からなかった。

……飛び出そう。相手がどこを向いていても、多分不意は突ける。

何の根拠もない自信。だが、そう思わずには、とてもじゃないがやれそうになかった。

頭の中でカウントを始める。

3……2……1、

っ！

俺は氷の棒を上段に構えて、一気に飛び出した。

「つつつ!？」

そこには……………誰も居ない。

「はぁ……………はぁ……………」

緊張で心臓がはち切れそうだ。

ここは、大丈夫。そうだ、次に行かないと。次に……。だが、そうは思いつつも、俺の体は中々動きだそうとしなかった。安全であると確認できたこの場所に、縋りつきたい気持ちがあったのかもしれない。

それぐらい鬼気迫っていた。

更には、あまりの安堵に膝に手をつき、構えさえも解き、脱力してしまった。

まだ安心できる状況ではないと、分かっていたのに……。

そして、そのまま呆けていた俺に、

「何をしているのですか？」

そう問いが投げかけられ、それに反応する前に、後ろから伸びてきた手に握られたカッターの刃が、俺の首筋に当てられた。

——終わった。

瞬間的に、頭にそんな言葉が浮かんた。

空き巣を捕まえようとして反撃に遭い、殺される。酷く滑稽な話だ。

だけれど、事ここに至って、先程までの緊張が嘘のように頭に冷静さが帰ってきた。

そして、そうなってから気付いた。

この声、かなり聞き覚えが……いや、もとい知っている。

「って、兄さんじゃないですか」

その言葉とともに、首に当てられていたカッターが離れていく。カッターを持つ手は白く、細く、きれいで、自分が想像していた空き巣のイメージとは大きくかけ離れていた。

その手の持ち主は――

「もう、驚かせないで下さい」

俺の妹である『こかきばらすみれ榊原董』のものだった。

「な、なんだ、董か……」

あまりの安堵に、俺は膝から崩れ落ちてしまった。緊張を抑えて、能力まで使って、必死こいて空き巣を捕まえようとしていた俺の苦労は一体なんだったのだろう。

「なんだじゃありませんよ。夕食の準備も一段落したから、掃除でもしようと部屋に入ったら、こっそり玄関から人が入ってくる音が聞こえたんですよ。強盗かと思いました」

どうやら、董には最初からバレバレだったみたいだ。

確かに、隠密行動なんて一介の高校生に出来る事ではないだろうが、いや、それにしただって――

「こっちだって、家の灯りがついてて、空き巣にでも入られたと思っただぞ。そもそも、強盗相手にカッターで立ち向かうなんて、

反撃でもされたらどうするつもりだったんだよ」

どこの世界に強盗の後ろを取って、刃物で動きを封じる中学生が居るといふのだろう。

俺の言葉を聞くと、董は俺が持っている氷の棒に視線を移し、眉根を寄せた。

「そんなものを持って空き巣に挑もうとした兄さんに、言われたいはないですね」

「うっ……」

全く持ったの正論。

更に言つと俺は、強盗の不意を突くつもりで、逆に不意を突かれている。

反論出来る状況ではなかった。

「それに、外に居る時点で気付いたのなら、警察に電話するなり何なり出来たでしょう」

「確かにそうだけど………そ、そうだ、来るなら来るって連絡してくれれば、こっちだってこんなに慌てずに済んだんだぞ」

合鍵は両親に渡してあるから、董がそれを借りて勝手に入ってくるのはいい。

だが、連絡でもしてくれなくては、俺がいない間に誰かが自宅に入り込んでいたら、驚くのは当然の事だ。

すると、董は先程のまでの不機嫌な顔から一転、笑顔で問いかけてくる。

「兄さん、学校から帰って来るまでに携帯電話はチェックしました？ 私、メールも送ったし電話も掛けましたけど」

……そういえば、学校を出てから全く携帯はチェックしていない。マナーモードにしなければなしで、買い物のためにスーパーなどを回っていたから、気付かなかったのだろう。

携帯を開くと、確かにメールが三通と、着信が2つある。

「……ごめん、気付かなかった」

どうやら、悪いのは全面的にこちらのようだった。

「もう、そんなことだろうと思ってました」

呆れたと言わんばかりに、董は笑顔を崩した。

——ああ、これはまた説教かな。

以前は優しかった董も、俺がこの高校へ進学する事を述べてから、説教ばかりするようになってしまった。

ここにやってきて、俺のだらしないところを見つけては、正座をさせて10〜20分は続く説教をする。

俺の事を案じての事なのだということは分かる。生活能力に欠けている俺を心配して、わざわざ怒ってくれている。

董は本当に、兄の自分よりも良く出来た妹だ。

とはいえ、怒った董は妙に迫力があって、説教を受けている間は身の縮む思いをしていなければならない。

そんなわけで、俺は説教を耐え抜く覚悟を決めて、董の次の言葉を待った。

「……はあ、もうすぐご飯の支度が出来ますから、待ってて下さい」

「ああ、ありがとう……え？」

だが、予想に反し、董の話はそこで終わる。

「どうかしました？」

「いや、何も……」

「そうですか」

董はカッターを部屋にしまつと、すぐにキッチンに戻り、夕食の準備を再開し始めた。

多少疑問に思いはしたものの、あれこれと考える元気は、今の俺にはない。

先の一件が妙に体に響き、どつと疲れてしまった。今は董の言葉に甘えるでしょう。

まあもとより、自分が董の手伝いをする事などまれではあるのだが。

俺は荷物を自室へと置き、すぐに居間へと戻った。

長方形のテーブルに着き、何をするともなく、董が食事の支度をする光景を眺める。

董は、昔から物事を器量良くこなすことの出来る奴だった。

勉強や運動はもちろんのこと、家事全般という家のことまで、既に小学生の頃から、そのスペックは自分より高かったのではないだろうか。

当時塞ぎ込んでいた俺の世話を焼いていたのも、董だった。

あの頃から既に良い妹だったのだが、よくそのまま成長したものだと思う。

普通は兄に対して嫌悪する時期くらい、どこの妹さんにもあるものだと思うのだが、董はそうだったものが全くなかった。

これで両親に対しての反抗期もなかったというのだから、本当に董は良く出来た人間だと思う。

『天は二物を与えず』という言葉を、董に関してだけは疑わざる

を得ない。

董の容姿は………そう、落乃辺りと比べると少し身長が高い程度だ。

だが、その分細く、色白で、見た目はか弱い少女そのもの。落乃の方が肉付きはいいのだと思う。

髪は黒で、普段から黄色のシュシュでその髪を後ろでまとめ、ポニーテールにしている。

道行く人々に尋ねれば、誰もがかわいいと口を揃えるであろう事が、想像に難くなかった。

見た目も、中身も良い。

別に、豊富な才能と優れた容姿を持ち合わせている妹を羨ましいと思った事はない。

こんな兄の次に生まれて、何故それ程のものを持っているのかと、心底疑問に思った事ならあったが。

「出来ましたよ」

「あ、ああ」

気付けば、既に夕食は出来上がっていた。配膳を手伝い、料理を運び終わったら、二人向き合ってテーブルに着く。

二人で食事をするときは、この位置取りが通例であった。挨拶をして、食事に手を付ける。

そういえば、董の料理を食べるのって、先月以来だっけ。

董がここに来るのは、特別珍しい事ではない。いや、むしろ去年などはそれが当たり前だった。

俺が実家を、地元を、自分が生まれ育った県を出て、この場所に一人暮らしを始めてから、董は毎週末、このアパートまでやって来るようになった。

土曜の朝に来て、俺の世話をしつつ一泊し、次の日の午後に実家へと帰る。

余程重要な用事でもない限り、董はそれを毎週休まずにやっていた。

最早、感嘆の言葉しか出ない。

董が何故そんな事をずっと続けていたのか。

それはもちろん、俺がちゃんとした生活を送っているか、様子を見る為だ。

基本は何かと世話を焼いてくれるのだが、一度自分の怠惰な生活ぶりを発見すると、先程も述べたように、長々とした説教が始まってしまう。

普通であれば、学生達は週末になるにつれ、「もうすぐ休みだ」と、次第に気分が高揚していくものであるう。

しかし自分は逆で、週末に近づくにつれ、気を引き締めていかなければいけない。

董がやってくる前の日である金曜日に、何かと隠蔽仕事を働いたものだ。

とはいえ、董が毎週欠かさずここに来ていたのも、去年の秋までの事。

董は今、中学3年生。つまりは受験生だ。

当然、受験勉強やらなんやらで、休みの度にこちらに来ることは出来なくなった。

11月あたりから徐々にここに来る数は少なくなり、今に至っては、ここ最近こちらに来たのは、1月の中旬に顔を出して以来、約一カ月振りの事となる。

—— ああ、そういえば。

ふと思い浮かんだ疑問を、董に尋ねる。

「そういえば、何で今日来たんだ？ いつもは土曜に来るのに」

今日の日付は、2月19日、金曜日。

来る頻度が減ったとはいえ、訪れる曜日は土曜に固定されていた

筈だ。

「今日は学校が早く終わったんですよ。もう一カ月も兄さんに会ってないし、どうせならたくさん一緒に過ごせるように、今日来ようと思って」

「わざわざそう急がなくても……」

「私が勝手にそう思って来ただけですよ。兄さんは気にしないで下さい」

その勝手にこちらは戸惑わされたわけなんだけど……。ああ、落ち度があるのはこっちだったか。

何にせよ、この話を蒸し返しても、分が悪いのはこちらだ。

「それより兄さん、このクリームシチュー自信作なんですよ。どうですか？」

「ああ、おいしいよ。董の料理、久しぶりに食ったからかな、余計そう感じる」

「そうですか、良かった」

董は俺がクリームシチューを食べるのを見ながら、にこにこしている。

なんだろう、今日の董は心なしか上機嫌なように見える。

「うん、ホントにおいしい。久しぶりだよ、こんなまともな食事」

「へえ……久しぶりなんですか。まともな食事が」

「はっ！」

董は背筋の凍るような笑顔でこちらを見ている。また墓穴を掘ってしまったみたいだ。

一人暮らしの俺の生活費は、両親から毎月一定額を貰ってまかな

っている。

その中には小遣いも含まれているのだが、当然無駄遣いばかりしていいわけはなく、趣味にばかりお金を費やさないで、ちゃんと毎日の食事でバランスの取れた栄養のあるものを食べるようにと、董から散々言われていた。

「兄さんが今日買い物へ行って買ってきたもの、さっき見たんですが、インスタント食品や冷凍食品ばかりでしたね……」

「……………」

「それと、兄さんの部屋を掃除しようと部屋に入った時に、ベッドに積まれている数十冊の本を見つけました。あれ、全部でいくらくらいしたんですか？」

完璧に、全て読まれていた。

俺はこんな性格だから、昔から家に引きこもりがちで、小説を読むのが趣味だった。

家でも学校でも、暇なときは大体本を読んでいる。

しかしながら、それだけ本を読んでいると、読む本の購入代も馬鹿にならない。

図書館などで借りたりすればいいのだろうが、俺は極力読む本を自分で購入し、自分の手元に置いておきたいという、何ともお金のかかる主義の持ち主だった。

その為、本の購入費は必然的に食費から削ることになり、くわえて、読書により時間が削られ、面倒な家事をしなくなりがちになり、簡単なインスタントや冷凍食品に頼ることになってしまう。

そして当然ながら、自分で料理をしないで、インスタントや冷凍食品を頼れば、その分余計にお金がかかる。

俺個人の経済事情は、更に圧迫されてしまうのだ。なんて見事な負のスパイラルだろうか。

董が突然来たために、それらの証拠を隠す事もままならなかった。

というより、久しぶりだったので完全に忘れていた。
だが、先程と同じで董の反応は、

「もう、せめて私がいる週末だけは、まともなものを食べてもらいますからね。さ、今日の分も残さず食べてください」

「あ、はい……」

やはり、いつもの説教が後に続かない。

思えば、ここへ来る頻度が減る事に比例して、董が俺に対して説教をする回数も減ってきているような気がする。

そりゃあ、ここへ来る回数が減れば、自ずと説教の回数も減る。

だが、それ以上に、董が怒ることが少なくなってきたように感じるのだ。

そういえば、一カ月前に董が来たときは、説教なんて受けただろうか？

ぱっと頭に思い浮かばない。

まあ、董だって大事な高校受験を控えているのだ。自分の事を優先して、他の事が疎かになる事もあるだろう。

……いや、でも董だったら、一つの事に集中して、今まで続けた事を疎かにするような、今までの均衡を崩すようなバランスの悪い事はしない筈だ。

頭の中を、妙な違和感が掠めていく。

「兄さん？」

「あ、いや、何でもない」

ちょっと気にし過ぎかな。

無理矢理に思考を切り替え、疑問を払拭した俺は、再び食事へと手を付けた。

「それで、この一カ月間は何も変わりはありませんでしたか？」

董が訪ねている事は、俺の能力について、他人にそれが見つかってはいないか、ということだろう。

俺が実家を出て、董が心配しているのは、何も俺の生活能力が低い事だけじゃない。

董はここに来る度に、今のような事を俺に尋ねてきていた。

「大丈夫だよ、問題は何もなかったさ」

「それならいいんですけど……」

夕食を終えた後は、俺と董とでそれぞれ近況を報告し合い、談笑へと相成った。

俺は特に話のネタになるようなものは持っていないし、そんなものを得るような生活を送っているわけではないので、喋るのは専ら董ではあったが、それでも自分にとっては楽しい一時を過ごせたと思う。

元々友達もろくに居ない自分にとって、話し相手は董が主だった。董と過ごした多くの時間はかけがえないもので、それは今も同じだ。

わざわざ隣の県まで来て、話し相手になってくれるその彼女の行動は、今の俺にとって非常にありがたいものだった。

怒られるのは確かに怖いけど、それ以上に優しく、献身的に世話をしてくれる妹である事も、また確かなのだ。

しばらく話しこみ、良い頃合いになったところで、それぞれ入浴を済ませ、二人とも就寝することにした。

俺は自室で、董は余っているもう一室で寝る。

別に居間で寝る事も出来るが、せっかく部屋が余っているのだからと、俺は董にもう一室の部屋で寝る事を進めていた。

「久しぶりだし、今日は兄さんと一緒に寝てもいいかな？」
「ええっ?!」

ピンク色のパジャマを着た董が、こちらに微笑みかけながら、酷く魅力的な提案をしてくる。

これだけかわいい女の子からそんな事を言われれば、さしもの自分も黙っておけないというものだが、いかんせん董は妹だ。

この歳にもなつて、流石にそれはまずいだろう。俺は平静を装つて、董の提案を断ろうとした。

「さ、さすがにこの歳にもなつて——」
「ふふ、冗談ですよ。お休みなさい、兄さん」

そう言つと、董は部屋へと戻つていった。

そして自分というと、妹である董の冗談に内心かなり動揺しながら、その心を鎮める為に、自室のベッドへと潜り込んでいた。

全く、董も言つようになつたものだ。だけど、ああいう心臓に悪い冗談は、出来れば止めてほしい。

妹であるとはいえ、そもそも女性に対して、俺は全く免疫がないのだから。

まあ、今日は疲れたし、とにかく早く眠ることにしよう。

やはりというか、本当に疲れていたのだと思う。

多少の気持ちの昂ぶりがあつたものの、そうやって俺は、早々に眠りに就いた。

第3話 『開花までの間奏曲』

2月21日 日曜日

時刻は正午過ぎ。

いつも土曜にこのアパートを訪れる董は、日曜の昼過ぎ、夕方になる前にはここを出て、実家へと帰るようにしている。

今回は金曜の夕方という、いつもより一日早い来訪ではあったが、帰りに関しては普段と同じだった。

今は既に帰り支度を済ませ、どこへ行くともなく、居間で俺とのんびりとした午後を過ごしている。

お互いテールブルに着き、テレビを眺めたり、雑誌や本でも読んだり、宿題や勉強をしたり、たまに口を開いて雑談などをしたりする。今までの一年の中で、幾度も見られてきた光景だった。

「……………すう……………ふぁ」

テレビではドラマが流れている。

先程まではそれを見ていた董だったが、しばらくすると、頬杖をついたままうつらうつらと船を漕ぎだし、姿勢が崩れた拍子にはつと目を覚ました。

そしてまたドラマを眺めながら、再び微睡みだす。先程から董はこの動作を繰り返していた。

おそらく、疲れているのだろう。

昨年は毎週足しげく通いつめていた董だが、ここ一ヶ月近くは全くこちらに来ていない。

昨日話を聞いた所によると、ちょうど一週間前が受験だったらしい。

第一志望ではなく、滑り止めの学校の受験だったようだが、試験

も面接もそれなりに上手くいったのだとか。

董自身がそう言うのだから、俺としては何も心配してはいないのだが、試験勉強や受験への準備で忙しかったのだろうか、この辺りから窺い知れた。

だというのに、そんな疲れた体を引きずってわざわざ兄の世話を焼きに来てくれたのだ。

感謝の念で頭が上がらなかった。

と、董の受験について思いを馳せていたとき、前々から董に聞くうと思っていたことを、ふと思い出した。

あいつ、どこの高校を受けるつもりなのだろう？

一週間前の受験の話ですら昨日聞いたことであり、そういった妹の事情について、俺は全く知らなかった。

家族としてこれはどうなのだろうか。

いや、わざわざ週末に来てくれる董に対して勉強の話を持ち出すのも……、などと気を使って、あえて話に出していなかったただけなのだが、それにしただけで妹の進路の話を知らなさ過ぎだ。

もし、遠くの高校へ通うことになって、寮にでも入るということになれば、しばらく会えなくなってしまうだろう。

特別寂しいというわけではないが、やはりそういうことは早めに知っておきたい。

そんな事を考えながら董を眺めていると、ちょうど微睡みの状態から目覚めた彼女と目が合った。

董は慌てて服の袖で口元を拭くと、居住まいを正してこちらに向き直る。

「な、何ですか兄さん？」

恥ずかしいところを見られたと思っているのか、頬を赤く染めながらぎこちない笑みを浮かべていた。

そんな動作が可愛らしくて、それが妹ながら、妙に和んでしまう。

「に、兄さん！ なに笑ってるんですか！」

自然と笑みが漏れてしまっていたようだ。堇は、今度は少し剥れた表情をしている。

「何でもないよ。それより、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「むう……いいでしょう、何が聞きたいんです？」

「志望校のことだよ。一週間前のやつは第一志望じゃなかったんだろ？ 本命はどこなんだろうと思って」

「第一志望ですか……。私が受験しようと思っている高校は……」

「高校は？」

「……………」

「……………」

まるで、今から言うことが余程重要なことだとも言わんばかりに、堇は妙な緊張感を孕んだ間を置いた。

そんな堇の雰囲気、こちらも嫌に緊張させられる。

「高校の……名前は……」

「……………名前は？」

ごくり、と思わず喉が鳴った。

そして、緊張が最高潮に達した瞬間、堇は口を開き――

「――秘密です」

「……………へ？」

「だから、秘密です」

「ひ、秘密って……。俺はまた、めちゃくちゃレベルの高い高校でも受けるのかと思ったよ」

「ふふ、ごめんなさい兄さん。兄さんをびつくりさせたいから、今はまだ教えません」

「てことは、やっぱり陽日冠高校辺り？」

「さあ、どうでしょう」

董は楽しそうに俺の問い掛けをかわす。

陽日冠高校と言えば、県内でも有数の進学校だ。

董ぐらい頭が良いのであれば、これぐらいの学校は受けても申し分ないと思うのだけど、董の反応を見る限りそうでもないようだ。

俺が聞いて驚くような高校とは、他にどこがあるだろう？ いまいち思い当たらない。

……でもまあ、この話はここまででいいか。

董なら、どこの高校だろうとちゃんと合格を決めてくれるだろう。何せ出来ない兄と違い、董は良く出来た妹なのだから。

その時になって、存分に驚いてやればいい。

「質問は以上ですか？」

「うん。期待して待ってるよ」

「ふふ、期待して待ってて下さい」

それきり、居間はいつもの休日の風景へと戻っていった。

「それでは、私は帰りますけど、くれぐれもだらけた生活ばかり送らないで下さいね」

「……なるべく頑張るよにするよ」

16時頃になると、董は既にまとめていた荷物を手に、実家へと帰っていった。

突然の来訪には驚いたが、久しぶりに董と過ごした休日は、非常に心地よいものだった。

何故かは分からないが、多少角が取れていて、それは、実家で一緒に暮らしていた頃の董を彷彿とさせた。

怒りさえしなければ、董は基本優しい奴なのだ。

おいしい料理を食べることも出来たし、一人でだらだらと過ごす休日よりは大分ましだっただろう。

次に董がここを訪れるのがいつになるかは分からないが、その時には少しでも心配を掛けさせないようにしよう。

既に受験は終わっているかもしれないが、ちよつとは董の負担を減らして、安心させてやりたい。

その為にも――

「まずは、まとも料理を作れるようになるう……」

本ばかりにお金を費やしてはいられなくなるのが心苦しいが、こればかりは仕方が無い。

……そうだ、たまには料理の本を読んでみるのもいいかもしれない。

だらしない性格の俺にどこまで出来るかは分からないが、何とか頑張ってみるか。

2月23日 火曜日

すっかり空も暗くなり、既に夜の帳も降り切ってしまったであろう20時頃。

しんと静まり返り、たまにページのめくる音だけが聞こえていた部屋の中に、簡素なチャイムの音が響き渡った。

俺は読んでいた小説に槩を挟み、それを手近な所へ置いて、玄関へ向かった。

ここを訪問する人物はそう多くないが、この時間帯であれば決まっただけの人だろう。

玄関を開け、そこに居る人物が想像通りの人であったことを確認すると、俺はいつものようにその人を迎え入れた。

「こんばんは、啓治さん」

「おう、久しぶり」

スーツの上からベージュ色のコートを着込んだ、整った中性的な顔立ちの、20代の男。

そこに居たのは、俺の従兄である寺内啓治であった。

「悪いな、来るのがこんな久々になっちゃって。最近仕事を立て込んでてな。そこいら中走り回ってばっかさ」

「大変そうですね……。何か飲みます？」

「コーヒーを頼む」

「分かりました」

俺は手早くインスタントのコーヒーを用意すると、テーブルについて一息ついていていた啓治さんに、カップを差し出した。

「凍えた体にはやっぱこれだな」

熱いであろうコーヒーを、啓治さんは余り間をおかずにすすっていく。外の寒さを考えれば仕方のないことだろう。

そうして半分ほど飲み終えたところで、啓治さんはカップをテーブルに戻し、一呼吸間を置くと口を開いた。

「それで、生活の方はどうだ？ 何か問題とかはないか？」

「万事大丈夫ですよ。特に変わりはないです」

「そうか。それならいいんだが」

啓治さんは、俺の母親の姉の子供だ。

小さい頃から兄貴分のような存在であり、今は県を中心地である香俱市にある警察署、香俱市警に勤めている新人刑事である。

母に頼まれ、親元を離れて暮らしている俺の様子を、時々見に来てくれている。

いつも休日に訪れる董と違い、啓治さんが来るのは専ら平日で、更には仕事上がりにわざわざ足を運んで来てくれる。

といっても、仕事の方が忙しいらしく、本当に時々でしかないのだけだ。

「叔母さんの方からしょっちゅう電話がくるんだよ。葵は元気そうかって」

「あはは……、何だか申し訳ないです」

息子のみならず、従兄にまで電話をしていたとは……。

「まあ別にいいんだけどさ。叔父さんはそうでもないけど、董ちゃんも叔母さんも大概心配性だよなあ」

啓治さんは快活に笑いながらそう言う。

確かに、董ほどじゃないけど、母も心配性な方だと思う。

……さてよ。もしかして、董のあれは母親譲りということなんだろうか？

もしそうなら、母の過保護っぷりを数倍割増して遺伝していることになるだろう。

……… なんだか、余り考えたくはない。

「そついや、腹減ったな……。葵、もう飯食ったか？」

「いえ、まだです」

小説を読みふけていた為、食べるどころか作る準備さえしていない。

董を心配させまいという意気込みもどこへやらだ……。我ながら、情けない。

「よし、じゃあ食いに行くか」

「なんか、毎度ご馳走させてもらって、ありがとうございます」

「これくらいどうってことねえよ。どうせ今月も金欠なんだろう？」

さあ、行こうぜ」

「はい」

啓治さんが来ると、外食へ行く流れが、最近では恒例化していた。こちらのお財布事情を慮ってくれたり、毎月月末が金欠状態であることを母には黙っていてくれたりと、啓治さんには頭が上がりない。

俺も、これぐらい器の大きく、気の良い人間になってみたいものだ……。

「……………」

叶わぬ願い、だと思っけど。

視界の端に映る紺色の髪を覚めた視線で見つめながら、俺は玄関へと向かった。

暦が3月へと移ってから、肌を刺すような寒さは依然として収まることを知らず、今の時点ではまだ春の訪れなど微塵も感じることとは出来ない。

だけど、そんな気候の中、俺は寒さを堪えながら外へと繰り出した。

向かう場所は校舎裏。

そこには、いつもと同じように彼女が居て、ベンチの半分を占拠した状態で、小さな弁当箱の中身をつついていた。

「やあ」

「……………」

そう一声かけて、ベンチの空いたもう半分のスペースへ腰を掛ける。

彼女……落乃の、箸を持つ手の動きが止まる。

落乃は流し目でこちらを一瞥すると、涼しげな表情で口を開いた。

「奇特な人ですね、あなたは。わざわざこんなところまで来て……」

「……寒くないのですか？」

「もちろん寒いよ」

現に、箸を持つ手は寒さで震えている。

でも、

「こんな良い場所、そうないしさ」

人目に付かない場所だから、という理由だけではない。

落乃と食事を共にし始めてから日付はそう経ってはいないが、今では落乃がいるから来ているようなものだった。

……もちろん、そんなことはとても口に出しては言えるものじゃないけれど。

「……そうですか」

落乃はそれだけ言っ、食事を再開した。俺も箸を進める。その後の昼食は、実に落ち着いた雰囲気に進んだ。

落乃は基本自分からは喋らないが、こちらが話を振れば必ず返してくれる。

俺もお喋りな方ではないから、話しかける回数はそう多くないが、そんなポツリポツリと続く会話が、何故か妙に心地の良いものだった。

「そういえば、落乃さんの方こそ寒くないの、ここに居て？」

ふと、頭に浮かんだ疑問を落乃に問う。

コートの袖からは白雪のように透き通った肌の手がのぞいており、顔の方も、頬が薄紅色に色付いているのを除けば真っ白だ。

元から色白な彼女だが、この寒さの中では、それが妙に気になっってしまう。

「別に、平気ですよ。コートのおかげもありますけど、私、元々寒さには強いんです」

「へえ、それはいいね。俺は暑さにバテることはそうないんだけど、寒いのはちよつと苦手で……」

落乃は寒さに強く、俺は暑さに強い。

髪の色が暖色と寒色なのといい、つくづく彼女と俺とでは正反対の事柄が多いみたいだ……あれ？

落乃が、再び流し目でこちらを見ている。その意味するところを

すぐに理解した俺は、慌てて口を開いた。

「あ、でも無理してここに来てるわけじゃ——」
「分かってますよ」

落乃は特に顔色も変えず、元の通りに視線を戻す。

……ちよつと気を遣い過ぎただろうか？

落乃はどうかのかわからないが、俺はここに好きで来ているのだ。
そこまで気にする必要はないのかもしれない。

そう考えているうちに、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。
落乃は既に鞆を手にしち上がっており、俺もすぐさま空の弁当箱
を鞆に突っ込む。

同学年である以上戻る場所はほぼ同じなので、最近では一緒に教室
近くまで帰るのが専らとなっていた。

人気のなく薄暗い廊下から、すぐに明るく喧騒のある廊下へとシ
フトする。

そう大きくもない校舎の中で、これほど明暗はつきりと分かれた
場所があるというのに、その境界線は曖昧である。

まるで表と裏の世界を行ったり来たりするようであり、かくも奇
妙な幽玄の世界というものを感じさせられる。

……これも、落乃と一緒にだからこそ、感じることできるものな
のだろうか？

2分もかからないうちに、一年の教室が並ぶ廊下まで到着した。

「明後日も、多分来ると思う」

「そうですか」

「うん。それじゃあ」

「ええ」

最後にその言葉を交わし、俺は教室へと戻った。

「よっ、今日はどうだった？」

授業の準備をしようと机に着いた俺に声を掛けてきたのは、友人である小笠原博人だ。

「どうって、何が？」

「昼飯、例の子と食べてきたんだろ？」

「ああ……。別に、いつもと同じだったけど」

「そうか」

尋ねてきた割には、こちらの返答に対する反応は薄い。

博人は身長こそ俺と同じで並みだけど、髪は短く、体付きもがちりとしていて、いかにも爽やかなスポーツマンといった風貌だ。

実際、弓道部に所属しているので、その見かけは間違っていない。

いつもはこの博人と昼食を供にしているんだけど、落乃と昼食を取って以降は、事情を話し、博人と落乃交互に昼を過ごすようになっていた。

こちらの勝手な都合に付き合わせているだけだというのに、博人は文句の一つも言わず、それどころか快く了承してくれた。

博人とは幼少の頃からの付き合いだから、彼が良い人物であることなんてずっと前から分かっていたことではあった。

とはいえ、こうまでしてくれることに疑問が湧かなかったわけではない。

博人にも、何か事情があるのだろうか……。

「珍しいよな」

「え、何が？」

「お前がよく知らない誰かと、仲良くなろうとしてることだよ」

「あつ……」

「いや、珍しいどころじゃないな。今まで一回も無かったことじゃないか？」

「確かに、そうだね……」

「そう変な顔するなよ。悪いことではないだろ？ ……おっと、もう授業が始まる。それじゃあ、また後でな」

博人の言葉で、一つの疑問が解消し、そしてまた一つの疑問が生まれた。

博人は、家族以外で俺の異質な力のことを知っている、数少ない内の一人だ。

俺が人を避け、目立たないように生きてきたことも、その理由も知っている。

だからこそ、俺が自ら落乃と一緒にいようとしたことに驚きながらも、止めはしなかったのだろう。

むしろ、俺の行いを助長しようとしているようにさえ見える。

博人はそうまでして俺の助けになろうとしているのだ。

……でも、博人の言葉で、俺は逆に疑問を抱いてしまった。いや、気付かされてしまった。

——— なんて、俺は落乃と仲良くなろうとしているんだ ———

人を避け、目立たぬように生活してきた俺が、彼女と積極的に関わろうとしている理由はなんなのか。

髪の色が普通じゃないことや、生き方が似ている、似た者同士だから？

彼女と初めて会ったときに抱いた感情を思い返す。

俺は落乃を他人のように思えず、酷く放っておけなかった。

では、それが答えなのだろうか？

「……………」

結局、いつの間にか始まっていた授業を放ってまで考えていたけれど、答えが出ることはなかった。

3月19日 金曜日

チャイムの音が鳴るとともに、生徒達の歓喜に満ちた声が学校中を支配した。

今は昼頃だが、もう既に学校は終わっている。今日は終業式だったのだ。

教室の中には、明日からの休みに顔を輝かせている者もいれば、休み中の部活に頭を悩ませている者もいる。

でも、心なしか皆の表情は明るいように見えた。

部活で忙しかろうとも、そうでなくとも、長期休暇に皆何らかの期待があるのだろうか。

俺は、そのどれでもなかった。

部活は元よりやっていないし、かといって休み中にやりたいことがあるわけでもない。

ただらだらするのが好きなので、何も無いことに越したことはないのだけれど、それで心が躍るかと言われれば、そんなことはないのだ。

「一年が終わるのも早かったな」

既に帰り支度を済ませ、鞆を肩に掛けた博人がそう言った。

「そうだね」

「4月になればもう先輩だしな。色々大変そうだ」

「部活？」

「ああ。この後も、昼挟んで練習だし、春休み中も部活で余り休みはなさそうだ」

「大変だね……。俺は、逆に何もすることがなくてさ」

自嘲気味な俺の言葉に、博人は苦笑しながら応える。

「別に、無理に部活やれなんて言わないしさ、お前はお前がやりたいことを見つければいいさ。多人数の助けがいるようなものでなくとも、一人で出来ることだってたくさんある。……そんじゃもう行くわ。暇なときにでも声掛けるから、どっか遊び行こうぜ」

「うん。それじゃあ」

博人は急ぎ足で教室を出ていった。

この高校は全員部活制を取っているから、休み中も学校へ行く生徒は多いだろうけど、特に運動部の生徒は大して休みの無い部活も多いようで、どこも大変そうだった。

……それと比べて俺は、なんと暇の多い春休みであろうか。

やりたいことをと博人は言うけれど、俺の頭にぱつと浮かぶことなんて、本を読むか、だらだらすることだけだ。

——なにか、将来へ向けての勉強とか、夢のあることに取り組んだ方がいいのかなあ……。

「榊原君」

「ん？」

博人と別れ、早速帰ろうとしていた折、昇降口で俺は声を掛けられた。

声の方を向けば、そこに居たのは落乃だ。

そっういえば……。

落乃を見て、俺は先程の終業式のことを思い出した。

『あつ……』

全校生徒が整列を行っている体育館の中。
俺は、落乃の姿をその中に見つけた。

『どうした、葵？』

博人が俺の視線を追い、納得したように言う。

『ああ、落乃火乃花ね。やっぱり目立つよなあ、あの髪』

博人の言う通り、落乃の赤味があった黒色の髪は、居並ぶ多くの黒髪の中で大いに目立つ。

それは俺の髪にも言えることではあるが、それにしても、俺は今までそんな髪を持つ女の子……つまりは落乃を、こういった多くの生徒が集う場所で目撃した記憶がなかった。

そして、思い知った。

それだけ俺は自分優先で、周りに目を向けていなかったのだと。

「？ どうしました？」

「ああ、いや何でもない。落乃さんも今帰り？」

「ええ。榊原君も？」

「うん。俺、帰宅部だからさ」

「そうですか……」

「……………」

「……………」

……うーん、こういう時は、帰り道にでも誘えばいいのかな？

落乃はといえば、妙にそわそわというか、もじもじとしていて、落ち着きがない。

どうしたものか……。

「あ、あの……榊原君」

「なに？」

「今日は、あなたに言いたいことがあって……」

「は、はあ……」

落乃は緊張の面持ちだ。一体、俺に言いたいことというのは……。昇降口で二人、顔を突き合わせる構図で、どれくらいの時間が経過しただろうか。

やがて、重い扉を開くぐらいの慎重さでもって、落乃は口を開いた。

「榊原君の……髪のことなんですけど」

「俺の髪？」

「ええ……。あなたは、以前私の髪のことを綺麗だと言いましたよね」

「うん、それが？」

「同じです」

「え？」

「同じですよ。まるで日没後のような、澄み切った紺色のあなたの髪も、同じぐらい綺麗です」

そう言い切った落乃は、まるで返答を待つように、俯き気味にこちらを見詰めている。

その頬は桜色に染まっていて、彼女にしては、緊張しているのだろことが窺えた。

「……………」

落乃の言葉に、俺の中には二つの感情が生まれた。

一つは驚き。

落乃がわざわざ、俺が綺麗だと言った御返しとして、俺に同じことを言ってくれたのだ。

これが驚かずにいられるだろうか。

そしてもう一つは……………喜び。

彼女の様子を見れば分かる。

——その言葉に、嘘はない。

であれば、俺が自分の髪をどう思っているかなど些細なことであり、二の次だ。

俺がやるべきことは——

「——ありがとう」

そう、素直な気持ちを伝えることだけ。

「……………はい」

返事をした落乃の顔には、先程までの緊張はもうない。

その代わりに、花が咲いたような、ささやかな微笑みが貼り付い

ていた。

「！」

それは、落乃が初めて見せてくれた笑顔だ。

いつもは、その幼い顔つきをクールな雰囲気で締め上げている彼女だが、微笑んでいるときには、年相応に戻っている。

……その笑顔は、これ以上ないくらいに可愛かった。

俺の視線に気付くと、落乃は慌てていつもの澄ました表情に戻った。

相変わらず、頬は赤いままだけど。

「そ、それでは私はこれで失礼します。……また、新学期に会いましょう」

「うん、また」

彼女はそう言って、俺の横を通り抜けて帰って行った。

「なんだか、安心した」

落乃が去ってから、急に安堵の気持ちに湧いた。

いつもはあんな澄ました顔をしているけど、それでいて彼女は、きちんと俺のことを慮ってくれていたのだ。

それに、だ。

滅多に見せてくれるものではないのかもしれないけど、あんな――

――あんな、可愛らしい笑顔だって、持っているんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653w/>

異色の御花

2011年11月15日05時35分発行